

[A年] 復活節第3主日(2025年5月4日)**【旧約聖書日課】列王記上 17章(8~16) 17~24節**

8また主の言葉がエリヤに臨んだ。9「立ってシドンのサレブタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」10彼は立ってサレブタに行った。町の入り口まで来ると、一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤはやもめに声をかけ、「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください」と言った。11彼女が取りに行こうとすると、エリヤは声をかけ、「パンも一切れ、手に持って来てください」と言った。12彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。」13エリヤは言った。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。14なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。

主が地の面に雨を降らせる日まで
壺の粉は尽きることなく
瓶の油はなくならない。」

15やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。こうして彼女もエリヤも、彼女の家の者も、幾日も食べ物に事欠かなかった。16主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった。

17その後、この家の女主人である彼女の息子が病気にかかった。病状は非常に重く、ついに息を引き取った。18彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはわたしにどんなかわりがあるのでしょうか。あなたはわたしに罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」19エリヤは、「あなたの息子をよこしなさい」と言って、彼女のふところから息子を受け取り、自分のいる階上の部屋に抱いて行って寝台に寝かせた。20彼は主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか。」21彼は子供の上に三度身を重ねてから、また主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命を元に返してください。」22主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子供は生き返った。23エリヤは、その子を

連れて家の階上の部屋から降りて来て、母親に渡し、「見なさい。あなたの息子は生きています」と言った。24女はエリヤに言った。「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です。」

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙 3章1~11節

1さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。2上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないようにしなさい。3あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。4あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。5だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。6これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。7あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。8今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。9互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、10造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。11そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。

【福音書日課】マタイによる福音書 12章38~42節

38すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。39イエスはお答えになった。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。40つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になる。41二ネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。二ネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。42また、南の国の女王は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記上 17章17～24節

⁸主の言葉がエリヤに臨んだ。⁹「すぐにシドンのサレブタへ行つて、そこに身を寄せなさい。私はそこで一人のやもめに命じて、あなたを養わせる。」¹⁰そこでエリヤは、すぐにサレブタへ向かった。町の入り口まで来ると、そこで一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤは彼女に声をかけて言った。「器に少し水を持って来て、私に飲ませてください」と言った。¹¹そこで彼女が水を取りに行こうとすると、エリヤは呼び止めて言った。「どうかパンも一切れ持って来てください。」¹²すると彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。私には、焼いたパンなどありません。かめの中に一握りの小麦粉と、瓶に少しの油があるだけです。見てください。私は二本の薪を拾って来ましたが、これから私と息子のために調理するところです。それを食べてしまえば、あとは死ぬばかりです。」¹³エリヤは言った。「心配は要りません。帰って行き、あなたが言ったとおりに調理しなさい。だが、まずそれで、私のために小さいパン菓子を作り、私に持って来なさい。その後で、あなたと息子のために作りなさい。¹⁴なぜなら、イスラエルの神、主はこう言われる。『主がこの地に雨を降らせる日まで、かめの小麦粉は尽きず、瓶の油がなくなることはない。』」¹⁵やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。それで、彼女もエリヤも、彼女の家の者も幾日も食べることができた。¹⁶主がエリヤを通して告げられた言葉どおり、かめの小麦粉は尽きず、瓶の油がなくなることもなかった。

¹⁷これらの出来事の後、この家の女主人の息子が病気になる。病気は大変重く、その子はずいに息絶えた。¹⁸彼女はエリヤに言った。「神の人、あなたは私と何の関りがあるというのですか。あなたは私の過ちを思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」¹⁹しかしエリヤは、「子どもを私によこしなさい」と言って、彼女の懐から息子を受け取り、自分が泊っている階上の部屋に抱いて上がり、寝台に寝かせた。²⁰そして主に叫んだ。「わが神、主よ、私が身を寄せているこのやもめにまで災いをもたらし、その子を死なせるおつもりですか。」²¹彼は子どもの上に三度身を重ね、主に叫んだ。「わが神、主よ、どうかこの子の命を元に戻してください。」²²主はエリヤの願いを聞き入れ、その子の命を元に戻されたので、その子は生き返った。²³エリヤはその子を抱いて階上の部屋から降りて家中に入り、その子を母に渡した。「御覧なさい。子ども

は生きています」と言うと、²⁴彼女はエリヤに言った。「あなたが神の人であることが、たった今分かりました。あなたの口にある主の言葉は真実です。」

コロサイの信徒への手紙 3章1～11節

¹あなたがたはキリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。²上にあるものを思いなさい。地上のものに思いを寄せてはなりません。³あなたがたはすでに死んで、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているからです。⁴あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。

⁵だから、地上の体に属するもの、すなわち、淫らな行い、汚れた行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝にほかなりません。⁶これらのことのために、神の怒りが不従順の子らの上に下るのです。⁷あなたがたも、以前このようなものの中に生きていたときは、そのように歩んでいました。⁸しかし今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、冒瀆〔別訳→悪口〕、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。⁹互いに嘘についてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、¹⁰新しい人を着なさい。新しい人は、造り主のかたち〔一僕〕に従ってますます新たにされ、真の知識に達するのです。¹¹そこには、もはやギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開の人、スキタイ人、奴隸、自由人の違いはありません。キリストがすべてであり、すべてのものの中におられるのです。

マタイによる福音書 12章38～42節

³⁸そのとき、律法学者とファリサイ派の人々の何人かがイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。³⁹イエスはお答えになった。「邪悪で不義の時代はしるしを欲しがりますが、預言者ヨナのしるしのほかにしるしは与えられない。⁴⁰つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中になることとなる。⁴¹裁きの時には、ニネベの人たちが今の時代の者たちと共に復活し、この時代を罪に定めるであろう。ニネベの人たちは、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。だが、ここに、ヨナにまさるものがある〔別訳→まさる者がいる〕。⁴²裁きの時には、南の女王が今の時代の者たちと共に復活し、この時代を罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。だが、ここに、ソロモンにまさるものがある。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・5月4日「復活節第3主日」の日課主題は「新しい命」。

・旧約日課は、「列王記上」から、預言者エリヤの物語の最初の説話伝承の箇所。使徒書日課は、「コロサイの信徒への手紙」から、キリスト信者としての心構えを教える箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、ファリサイ派らが主イエスに「しるし」を求めた逸話を伝える箇所。

旧約日課(王上 17 章より)

・「列王記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第四部を構成する歴史物語文書。「前の預言者」(ヨシュア記～列王記)は、モーセの後継者とされるヨシュアに率いられて定住したとされるイスラエルのカナン地方定住時代を歴史年代順に物語る「イスラエル正史物語」を構成している。その中で「列王記」は、サウルおよびダビデによる草創期を経て成立したユダおよびイスラエルの歴代王の年代誌として編纂されている。伝説性の高いソロモン王の時代と北王国イスラエル滅亡後を除けば、全般的に、北部諸部族連合王国として地域覇権を競うイスラエル王国と、同国に追従させられる南部のユダ族・ベニヤミン族のユダ王国、という構図で展開している。聖書外史料からも、両国の関係性は、概ね本書が描くような関係性が史実であったと推察される。よって、イスラエル王国(北王国)が存立している時代の物語は、もっぱら北王国の歴史物語という色彩が強い。日課箇所は、北王国中興のオムリ王朝時代(前9世紀)を背景に、同王朝がサマリア建設を通して確立した王権に対峙した諸地方聖所権力の中の象徴的存在、「預言者エリヤ」の物語の冒頭部に当たる。

・「預言者エリヤの物語」は、「列王記」中、上 17 章から下 2 章までに断続的に収められている。その出自は「ギレアドの住民である、ティシュベ人エリヤ」(17:1)としか示されておらず、本書に収められている物語も、必ずしも「エリヤ伝」としてまとめられているものではなく、さまざまな「エリヤ伝承説話」が寄せ集められたような構成となっている。他方で、正典「律法」で描かれる「モーセ物語」のモーセの人物像との共通性も指摘されるなど(たとえば、両者とも神の山ホレブで神と対面し使命を与えられる)、その伝説的要素は少なくない。

・日課箇所は、「エリヤ物語」の冒頭に置かれた召命譚に続く「サレプタの女の逸話」と呼ばれる説話。サレプタは「シドン」の地名で、シドンはフェニキア都市国家の一つ。同じフェニキア都市国家のティルスよりも古い時代に隆盛を極めたと考えられており、旧約正典中ではしばしば登場する。「預言者エリヤ」の背景となっている北王国オムリ王朝は、このシドンの王家と姻戚関係を結び、経済的また知的な利益を得て

いたと推認される(16:31~33)。この王朝の初代オムリ王が「サマリア」の「山」を買い取って更地から町(王都)を建設(16:23~24)することができたのも、シドンとの密接な協力関係を築くことができたからだろう。このシドンからもたらされた人材が、「バアルの預言者/祭司」として描かれ、エリヤらイスラエルの地方聖所祭司・預言者らの対峙する相手となるのである。

・「サレプタの女の逸話」は、飢饉が続く中、裕福な王国シドンの町サレプタにあっても貧困にあえぎ死を覚悟することになったやもめ親子を、エリヤが救った出来事として描かれる。二つの逸話で構成されているが、主題は共通しており、「命の喪失からの救い」であり、その出来事を通してエリヤの「神の人」としての真実性が示される。旧約正典において、「死者のよみがえり」の逸話は、この預言者エリヤの逸話の他には、エリヤの後継預言者エリシャによるもの(王下 4:33~35)のみであるが、「エゼキエル書」37 章および「ヨナ書」2 章、また「詩編」には象徴的な「死者の復活」を示唆する記述が見られる。エリヤおよびエリシャによる「死者のよみがえり」逸話は、新約において「死者のよみがえり」逸話が語られる際の下敷きになっていると推察される。

使徒書日課(コロサイ 3 章より)

・「コロサイの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第 7 に置かれた書簡文書。小アジアの都市コロサイに所在した教会共同体に宛てて、「パウロと兄弟テモテ」の連名で記された書簡とされているが、本書簡末尾に示されるように、小アジアの近隣都市の教会間で書簡が回覧されることを前提としており(4:16)、内容は必ずしもコロサイの地域共同体に限定されたものではなく、より一般的な教義の内容となっている。なお、現代の歴史批判的立場の聖書学者の中には本書簡をパウロの手によらない作品とみなす者もあるが、さまざまな仮説に基づいた主張であり、本書簡自体が「パウロと兄弟テモテから、コロサイにいる聖なる者たち」に宛てたものとして読まれることを求めた体裁となっていることを否定し得るものではない。

・日課箇所は、キリストによる救いを得るようになった者が、どのような心構えで日々の生活の中で信仰を保つべきかを教え、勧める中の一部である。

・「キリストと共に復活させられた」(1 節)という言説から展開されるキリスト信者の自己理解は、パウロが「ローマ書」で「キリストと結ばれる洗礼」によってもたらされるものとして展開させている(ロマ 6 章)。本書簡では、「ローマ書」での理解に加えて、「昇天されたキリスト」を信者の目指すべきものとして示しており、なお続く地上の生活における限界にとどまることなく、より高みを目指す生き方を勧め励ますものとなっている。

・「天上」と「地上」で表されるような世界観のイメージを、パウロは、一部の書簡では頻繁に用いている。これは、読み手の世界観を想定しての表現だろう。

福音書日課(マタイ 12 章より)

・日課箇所は、主イエスが律法学者とファリサイ派の人々から「しるし」を求められた逸話として描かれる説話で、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えている。ただし、「マタイ」と「ルカ」は、「ヨナのしるし」だけが与えられるという教えとして描くが、「マルコ」は、「しるし」は決して与えられないという教えとして描いている。この違いからは、主イエス(初代教会)の教えが、当初は「マルコ」が伝えるように「しるし」を否定するものであったが、旧約正典に基づくキリスト理解が進むにつれて「ヨナ」の出来事を「復活のしるし」と解する理解が定着し、これを例外の「しるし」として教えるようになった、というような経緯が推認される。ただし、「ルカ」は、「ヨナのしるし」を必ずしも「復活のしるし」と理解しておらず、「復活のしるし」と明確に結びつけているのは「マタイ」の場合のみである。

・関連する記事が 16:1~4 にある。

・「ヨナのしるし」は、旧約「ヨナ書」の物語が示唆する「死者の復活」を「キリストの復活」のしるしと解するもの。「しるし」と訳されるギリシア語「セーメイオン」は、「合図／兆し／警鐘」などとも訳される語。

来週の誕生日 (5月4日~10日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-323「喜び祝え、わが心よ」(= I 153)は 17 世紀ドイツの代表的な讚美歌作家パウル・ゲアハルトと、同じく代表的な作曲家ヨハン・クリューガーのコンビによる讚美歌の一つ。17 世紀のドイツ讚美歌の特徴は、内面的信仰を歌う「歌による信仰告白」。
- ・21-55「人となりたる神のこぼば」(= I 190「あめよりくだり人となりし」)。作詞のウィリアム・W・ハウは 19 世紀の著名な讚美歌作家で、英国教会の主教職の傍ら 60 曲以上の讚美歌を作曲発表している(21-379 番など)。曲は、作曲者不詳だが 17 世紀末の讚美歌集から知られ、メンデルスゾーンのアラトリオ「エリヤ」の合唱にも用いられている。
- ・21-75「今、装いせよ」(= II 95 番)。17 世紀ドイツの宗教詩人 J・フランクと当時随一の讚美歌作家 J・クリューガーのコンビによる。現代に至るまで聖餐讚美として広く用いられている。J.S.バッハは、この讚美歌を用いて作曲している。

21-323「喜び祝え、わが心よ」

Auf, auf mein Herz, mit Freuden

1. Auf, auf, mein Herz, / mit Freuden nimm wahr, / was heut geschieht; / wie kommt nach großem Leiden / nun ein so großes Licht! / Mein Heiland war gelegt / da, wo man uns hinträgt, / wenn von uns unser Geist / gen Himmel ist gereist.
2. Er war ins Grab gesenket, / der Feind trieb groß Geschrei; / eh er's vermeint und denket, / ist Christus wieder frei / und ruft: Viktoria!, / schwingt fröhlich hier und da / sein Fähnlein als ein Held, / der Feld und Mut behält.
3. Das ist mir anzuschauen / ein rechtes Freudenpiel; / nun soll mir nicht mehr grauen / vor allem, was mir will

entnehmen meinen Mut / zusamt dem edlen Gut, / so mir durch Jesus Christ / aus Lieb erworben ist.

4. Die Welt ist mir ein Lachen / mit ihrem großen Zorn; / sie zürnt und kann nichts / machen, all Arbeit ist verlor'n. / Die Trübsal trübt mir nicht / mein Herz und Angesicht; / das Unglück ist mein Glück, / die Nacht mein Sonnenblick.
5. Ich hang und bleib auch hangen / an Christus als ein Glied; / wo mein Haupt durch ist gängen, / da nimmt er mich auch mit. / Er reißet durch den Tod, / durch Welt, durch Sünd, durch Not, / er reißet durch die Höll; / ich bin stets sein Gesell.
6. Er dringt zum Saal der Ehren, / ich folg ihm immer nach / und darf mich gar nicht kehren / an einzig Ungemach. / Es tobe, was da kann, / mein Haupt nimmt sich mein an, / mein Heiland ist mein Schild, / der alles Toben stillt.
7. Er bringt mich an die Pforten, / die in den Himmel führt, / daran mit güldnen Worten / der Reim gelesen wird: / Wer dort wird mit verhöhnt, / wird hier auch mit gekrönt; / wer dort mit sterben geht, / wird hier auch mit erhöht.

21-55「人となりたる神のこぼば」

O Word of God Incarnate

1. O Word of God incarnate, / O Wisdom from on high, / O Truth unchanged, unchanging, / O Light of our dark sky: / we praise you for the radiance / that from the Scripture's page, / a lantern to our footsteps, / shines on from age to age.
2. The church from you, dear Master, / received the gift divine; / and still that light is lifted / o'er all the earth to shine. / It is the chart and compass / that all life's voyage through, / mid mists and rocks and quicksands, / still guides, O Christ, to you.
3. O make your church, dear Savior, / a lamp of burnished gold / to bear before the nations / your true light as of old. / O teach your wandering pilgrims / by this our path to trace / till, clouds and darkness ended, / we see you face to face.

21-75「今、装いせよ」

Schmücke dich, O liebe Seele

1. Schmücke dich, o liebe Seele, / laß die dunkle Sündenhöhle, / komm ans helle Licht gegangen, / fange herrlich an zu prangen! / Denn der Herr voll Heil und Gnaden / will dich jetzt zu Gaste laden; / der den Himmel kann verwalten, / will jetzt Herberg in dir halten.
2. Ach wie hungert mein Gemüte, / Menschenfreund, nach deiner Güte; / ach wie pfleg ich oft mit Tränen / mich nach deiner Kost zu sehnen; / ach wie pfeget mich zu dürsten / nach dem Trank des Lebensfürsten, / daß in diesem Brot und Weine / Christus sich mit mir vereine.
3. Heilige Freude, tiefes Bangen / nimmt mein Herze jetzt gefangen. / Das Geheimnis dieser Speise / und die unerforschte Weise / machet, daß ich früh vermerke, / Herr, die Größe deiner Werke. / Ist auch wohl ein Mensch zu finden, / der dein Allmacht sollt ergründen?
4. Nein, Vernunft, die muß hier weichen, / kann dies Wunder nicht erreichen, / daß dies Brot nie wird verzehret, / ob es gleich viel Tausend nähret, / und daß mit dem Saft der Reben / uns wird Christi Blut gegeben. / Gottes Geist nur kann uns leiten, / dies Geheimnis recht zu deuten!
5. Jesu, meine Lebenssonne, / Jesu, meine Freud und Wonne, / Jesu, du mein ganz Beginnen, / Lebensquell und Licht der Sinnen: / hier fall ich zu deinen Füßen; / laß mich würdiglich genießen / diese deine Himmelspeise / mir zum Heil und dir zum Preise.
6. Jesu, wahres Brot des Lebens, / hilf, daß ich doch nicht vergebens / oder mir vielleicht zum Schaden / sei zu deinem Tisch geladen. / Laß mich durch dies heilige Essen / deine Liebe recht ermessen, / daß ich auch, wie jetzt auf Erden, / mög dein Gast im Himmel werden.